

小説 税金で買った本①

ずいの／作 系山問／絵



講談社 青い鳥文庫

登場人物紹介
とうじょうじんぶつしやうかい

プロローグ
ぷろろーぐ

わくわく☆しりたい
どうぶつのなぞ

恩讐の彼方に
おんしゅうかなた

ゆる登山ミニガイド
ゆるとんさんミニガイド

放浪する青
ほうろうするあお

さつめ
四冊目

79

さつめ
三冊目

60

さつめ
二冊目

36

さつめ
一冊目

21

6

4

EXTRA



あとがき

200

放浪する青
新装版

八冊目
182

三びきのやぎのらがらどん

七冊目
152

YA! ENTERTAINMENT

六冊目
136

屋根裏の散歩者

五冊目
116



とう じょう じん ぶつ しょう かい
登場人物紹介

いし だいら き いち
石平紀一

ヤンキーの高校生。
ひよんなことから図
書館でアルバイトを
することに!?



はや せ まる さ や か
早瀬丸小夜香

しりつ と しょう かん はたら
市立図書館で働く、
やさしい図書館員。



しら い さと ゆき
白井里雪

ほん と しょう かん あい
本と図書館を愛する、
マッチョな図書館員。





あさ の
朝野

じ どう がかり と しよ かんいん
児童係の図書館員。
こ ころ ひろ
子どもには心が広い。

はい さか
灰坂

いし だいら こう こう とも だち
石平の高校の友達
いま けん あく
だが、今は険悪な
かん けい
関係。



やま だ
山田

いし だいら
石平と
おな こう こう とも だち
同じ高校の友達。
す なお うら おもて
素直で裏表がない。



プロローグ

図書館に返された本を書架にもどす仕事を、『配架』という。

市立図書館で働く図書館員、早瀬丸小夜香は、今日も配架をしていた。

本を正しい場所にもどし、書架を整理しながらも、本を探す利用者がいれば手助けする必要があるので、まわりに気を配らなければいけない。

「あの……早瀬丸さん……。」

自分と呼ぶ声に、仕事の手をいったんとめて、ふりむいた。いつもは明るく笑顔でやさつをしてくれる配架アルバイトの少女が、青ざめた顔で立っていた。

「あちらにカード作りたいかたがいらつしやるんですが……その……。」

声がふるえている。どうやら、やつかいなトラブルのようだ。

「……わかりました、私がお話しします。」



としよかん

駐車券はこ
ご利用者の皆様へ
ご利用の際は、必ず「駐車券」を
お持ちください。ご利用の際は、
ご利用のルールを必ずお読みください。
駐車場利用の際の注意
ご利用の際は、必ず「駐車券」を
お持ちください。ご利用の際は、
ご利用のルールを必ずお読みください。
ご利用の際は、必ず「駐車券」を
お持ちください。ご利用の際は、
ご利用のルールを必ずお読みください。

長いスカートと緑のエプロンをひらりとためかせ、カウンターへむかった。

カウンターの前のイスには、明るい髪色の少年がだらしなくすわっていた。

この図書館近くの高校の制服を着くずしている。目をキツとつりあげ、ふきげんな表情がこわい。早瀬丸はバイトの子がふるえていた理由をさつした。

プシュッ。炭酸飲料のキャップを開ける音が館内にひびく。

早瀬丸は内心、イヤだなあ、と思いつつ、ほくろのある口のはしにキュツと力をこめ、笑みを作る。

「おそれ入ります。飲み物をしまっていただけですか？」

「は？　なんで？」

この少年は館内のあちこちに貼っている注意書きを見ていないのだろうか。

「本が汚れると、いけませんので……。」

「へー。」

少年は意外にも素直にカバンへ飲み物をしまった。見た目の印象より、悪い子ではないのかもしれない。

貸し出しカードを作りたい……とのことなので、さっそく申込書を書いてもらう。

「図書館のカード、今までお作りしたことありませんよね？」

「ねえよ。」

ねえよ……と言われても、早瀬丸はすぐ信じない。利用者がむかし作った貸し出しカードのことを忘れることはよくある。それに気づかず同じ人のカードを二重に作ってはいけない。平等に一人一枚、そういうルールだからだ。

パソコンから図書館員用のシステムで確認すると……いた。少年と同じ名前、同じ生年月日、でも、苗字がちがう人のカードデータ。ぐうぜん、名前と誕生日が同じ人だといいな……と祈りつつ、早瀬丸は少年にたずねる。

「あの……失礼ですが、苗字変えられたことはあります……？」

「はあ？ ああ……小学校のとき、変わったけど……。」

じゃあ、やつぱりこの人、むかしカード作ったことあるんだ。

早瀬丸は、これからおきるトラブルを思いえがいて、小さくため息をつく。

少年——石平紀一を、ふだんは利用者が入れない事務所へ案内した。

ここは、利用者と『あること』について話するために使う部屋だ。

石平はふきげんな顔だが、物めずらしそうにきよろきよろと部屋のあちこちを見ている。

イヤだなあ、と早瀬丸はまた思った。

この部屋は資料室。ホワイトボードのすぐむこうのデスクで資料係が働いている。

本を買って貸し出せるよう準備したり、修理や廃棄の作業をしたりするのが『資料係』。ここには準備中の本のほかに、図書館を利用するすべての人の個人情報も保存されている。図書館は利用者の読書の自由を守るため、とくに個人情報の保護に気をつけなければならない。この少年がのぞきこんでこないか、不安だ。

応接用の長机においてあるイスを引く。

「そちらでしばらくお待ちください。」

また足を投げ出してだらしなくすわる石平にひとこと告げると、早瀬丸は急いでホワイ

トボードの裏にある棚から、とある書類を探す。

「なんだよ。」

「アッ!?」

一秒も待ちやしない！ 石平がホワイトボードのはしっこから顔をのぞかせるので、早瀬丸はうしろをかばうように手をひろげ、個人情報がつまった棚の前に立つ。

「こちら個人情報があるので……来ないで……。」

「個人情報？」

石平から見えないように隠しながら『長期延滞』と背に書かれた古いファイルをひろげて、めあてのものを探す。

「はい……たとえば長期延滞……何年も本をお返しただけなにかたの記録ですとか……あ、あつた。」

ファイルから紙を一枚ずり出す。ずいぶんむかしから保存され、少し黄ばんだ紙には『わくわく☆しりたい どうぶつのなぞ』というタイトルの児童書の表紙が印刷されている。紙を長机にのせて、石平に見せる。

「こちらの本、覚えていますか？」

石平は、少し眉間にシワをよせ、その紙をにらんだあと、こう吐き捨てた。

「なんだそりや。知らねえよ。」

「十年ほど前に、お借りいただいた本です。お返しただくまで貸し出しできなくなるきまりですので……。」

「はあ？ あるわけねえだろ、ンな本！」

おどろいた石平は大きな声を出す。

「あくたぶん引越したとき、どつかやったわ。」

それは、そうだろう。そのとき彼は小学生で、ほんとうなら保護者である家族が責任をとるべきだろう。少しかわいそうかもしれない。

だが。

「本が見つからない……その場合、弁償となります。」

かわいそうだからといって、とくべつあつかいはしない。

図書館はどの人にも平等に対応する。そういうルールだからだ。

バン！

石平いしだいらの手のひらに打うたれて、木製もくせいの机つくえが鳴なった。

「ふざけんな！　こんな大おおむかしの本ほん!!　時効じこうだろッ、時効じこう！」

お腹なかの底そこにずんとひびくような大おお声こえで、そうどなった。

市立図書館しりつとしよかんの本ほんの貸かし出だしは無む料りょう。だが、弁償べんしょうはお金かねが必要ひつようだ。

だからよく、こういうトラブルになる。大おおきな声こえでこわがらせて、自分じぶんの意見いけんを押おし通とおそうとする利用りよう者しゃがいる。ほかの人ひとの迷惑めいわくにならないよう、裏うらにあるこの部屋へやで弁償べんしょうの話をはなしすることになつてゐるのは、そのためだ。

結局けつぎあなたもそういう人ひとなんだ……と、早瀬丸はやせまるは思おもつた。新人しんじんのころは大おお声こえを出だす利用りよう者しゃをこわがつていた早瀬丸はやせまるも、今いまでは表情ひょうじょうも変かえず、冷静れいせいに対たい応おうできてしまう。

と、そのとき。

がたん！

石平いしひらの背後はいご、ホワイトボードの裏うらで、だれかがいきおいよく立ち上たあがった音おとがした。

「あつ。」

早瀬丸はやせまるは思わず気きのぬけた声こえを出だし、あわてて自分じぶんの口くちをふさぐ。

もつとめんどうなトラブルをおこしそうな人ひとが、立ち上たあがったのだ。

「？」

「……少々しよしょう、お待ちまちくださいね。」

ふしぎそうにふりかえる石平いしひらを待まちたせて、早瀬丸はやせまるはホワイトボードのむこうにいる人じんぶつ物ぶつに声こえをかける。

「いいの！ 大丈夫だいじょうぶだからあなたはそっちの仕事しごとして……いいってば……あなたが来くるとよけいに話はなしがこじれるからツツ。」

早瀬丸はやせまるのとめる声こえもむなく、ホワイトボードの陰かげから男おとこがあらわれる。
巨漢きょかんの図書館員としょかんいんだ。

石平いしひらも少し見上げるような大男おおおとこ。エプロンがはち切れそうなくらい筋肉質きんにくしつの肉体にくたい、重おもそうな段ボール箱だんぱうばこを片手で軽々かるがる持ち上げた眼鏡めがねの男おとこが、鬼おにの形相ぎやうそうで、あらわれた！
「どうも……白井しらいと申もうします。」

* * *

この男おとこの名なは、白井里雪しらいさとゆき。

それなりに長く働はたらいている図書館員としよかんいんだ。

かつては、やせていた。背せばかり高く、ひよろひよろと骨ほねばって、眼鏡めがねをかけた、よくいるふつうの本好きほんずきな青年せいねんだった。

ある日ひ、白井しらいが配架はいかする本ほんをカウンターから運はこぼうとしていると、女性じよせいの図書館員としよかんいんが、利用者りようしやに理不りふじん尽じんにどなられていた。

「なんでまだ雑誌読ざっしよめないんだよ！ 今日きょうのはずだろ！」

新しい雑誌あたらしざっしの準備じゆんびが遅おくれると、いつも怒おこって大きな声こえを出すおじいさんだ。

遅おくれる理由りゆうを説明せつめいし、お待ちまちくださいと頭あたまを下さげる若い女性わかじよせい図書館員としよかんいんをどなりつける。

「税金ぜいきんはらってるんだぞ、こっちは！」

『税金ぜいきん』。

わがままな利用者りようしゃはよくこの言葉ことばを使って図書館員としょかんいんをせめる。

高い税金たか ぜいきんをはらっている自分じぶんは良いサービスよ サービスを受けられるはずだ、そう言いってわがままを通とおそうとする。

へりくつだ。たしかに、図書館としょかんは国民全員こくみんぜんいんがはらう税金ぜいきんをもとにして運用うんようされる施設しせつのひとつだ。けれど、ここで働く人はたら ひとも、学校がっこうの先生せんせいも、警察官けいさつかんも、これを読よむあなたもきつと買かい物のとき『消費税しょうひぜい』という形かたちで、みんな税金ぜいきんをはらっている。

どうしてそんなに、えらそうにできるのだろう……と白井しろいはまゆをひそめた。

しかし、そのとき新人しんじんだった白井しろいにはまだ、こんなときどう声こえをかければいいか、わからない。うしろでおろおろしていると、ネクタイをしめたベテランの男性図書館員だんせいとしょかんいんが助けにやってくる。

男性図書館員だんせいとしょかんいんも同じおなように遅おくれる理由りゆうを説明せつめいし、お待ちくださいと頭あたまを下さげる。

「あ、ああ……。」

ついさきほどまでどなつていた老人が、自分と近い年ごろの男性図書館員を前にすると、急に怒りをしずめて、しおしおと帰つていった。

(二人とも同じことを言っているのに、なぜ?)

ふしぎに思つた白井は、むかし読んだ本に書いてあつたことをふと思ひ出した。

『動物は自分より強そうなものとは争わない。』

きびしい自然で生き残るため、野生動物はムダに争わない。勝てそうにない相手とは戦わず、にげる。さきほどの老人は、自分より年下の女性という立場の弱い人間だからあんなに強氣だつた。しかし、自分と年の変わらない男性と争うのは不利かもしれない。だから、にげたのだ。なんてひきような。それでも人間か。いや、人間もしよせんは動物なのだ。

こんな利用者に対して、図書館員として、自分にできることはあるか……白井はさらに本で読んだことを思い出す。

『動物は、自らを大きく見せて、争いをさける。』

ライオンはたてがみで、エリマキトカゲは首まわりのフリルを広げ、レッサーパンダはうしろ足で立ち上がり、自分は大きく強いと見せかけて相手を威嚇し、争いをさける。同じように、白井も強そうになればいいのだと思った。

それから白井は体をきたえた！

全身の筋肉を大きくする運動をした。筋肉となるたんぱく質を中心にバランスのいい食事をした。体のきたえかたは、図書館の本で学んだ。

白井はたくましましすぎる肉体を手に入れた！

本を、図書館を、そこにいる人々を守るために！

* * *

この白井がもつとも憎む利用者。

それが弁償をこぼむ利用者だ。

長年「税金ドロボウ。」「税金はらってんだぞ。」の言葉を投げつけられた白井が、『税

金』という言葉を利用者につきつける。



『税金』

で買った本だぞ。

返せよ！

一冊目 わくわく☆しりたい どうぶつのなぞ

「石平さん……図書はみなさまの税金で買った市民の財産です。どうか、弁償していただくようお願いいたします。」

ドスン、と重い音がして、白井と名のつた男のかついでいた段ボール箱が、俺のすぐ目の前、長机の上に落とされた。

俺——石平紀一が久しぶりに図書館に来たのは、ある本が借りたかったからだ。

それなのに……なんでこんなことになってんだ？

俺はただ、たんじゅんに本が借りただけなんだよ。

それがなんで……？

眼鏡で口元にほくろのある女に、よくわからない図書館の裏の部屋につれてこられた。

十年前に借りたらしいろくに覚えてない本のことをせめられて、弁償しろなんて言われて。

そのうえ、こんな……殺氣立った大男に、おどされているのは、なんでだ？

「な……なんだよ、これ……。」

箱の中には、古い本がたくさん入っている。

「廃棄本です。」

白井が、冷たい声で答える。

「長く利用して古くなったり、借りた人に汚されたり破られたりして、捨てることになった本たちですよ、かわいそうに……。」

白井の目にうつすら涙がうかんでいる。不気味だ。

やさしく本を持つたくましい手の甲には、くつきりと血管がうかんでいる。

なんだ、コイツ……。困って古い本の山に視線を落とすと、一冊の本が目に入った。思わずその本を手にとり、まじまじながめる。

この本は――。

「その本が、どうかしましたか？」

白井から問われる。

「べつにイ……。」

こんな変な男に深くたずねられたくない。本をもどした。

借りた覚えのない本の弁償は腹が立つ。が、それでもしないとこの場がどうにもならないならしかたない。めんどろだが弁償してやろうか。

「とにかく、弁償すりやいいんだろ？　いくら？」

自分の財布を出す。そのようすを見た眼鏡の女が、気を取り直したように説明する。

「いえ、お金は受けとれません。実物を買ってきてください。」

「は……？　めんどくせえな、勝手にそつちが買えばいいだろ！」

千円札を乱暴につき出す。

その手を、白井にありえないくらい強い力でつかまれた。痛い！

「市立図書館って役所が運営してるから、現金の取りあつかいきびしいですよ。」

「や、やめなさい白井くんッ。」

腕にくつきり、白井の指のあとが残った……。もはや白井に逆らうことは許されない。弁償する本の表紙が印刷されたコピー用紙を見て、舌打ちする。

「じゃあ……この……この……ガキの読む本を俺に買えって？」

いかにも子どもっぽいタイトルを言うのが恥ずかしく、かなりもごもごとしてしまった。そのようなを見た図書館員たちは、なぜか顔を見合わせ、ほっこりしている。

「はい、この『わくわく☆しりたい どうぶつのなぞ』という本を本屋さんで買ってきてくださいね。」

ここぞとばかりに本のタイトルを笑顔でゆつくり読み上げる眼鏡の女。美人だが、イヤな性格かもしれない。

「あなたが借りっぱなしのあいだに改訂版が出版されたので、そちらを買ってくださいね。この近くにある書店はココで、地図のこの場所……。」

真逆に、早口で説明をまくし立てる白井とかいう男。あーもーイライラする！
立ち上がり、また長机を叩く。

「もういいわ！ 二度と来ねえよッ、こんなところ！」

ひくつな気持ちになつて、笑みがこみあがる。

つづけて言つてやる。

「……だいたい、場ちがいだよなア……本当はアンタらも俺みてえなバカに来てほしくないだろ？」

立ち上がり、部屋を出ようとする。うしろからあわてた女の声がする。

「そ、そんなことはありません！ せっかくまた、ご来館いただけたのですから、これから――」

「いいんですか。」

白井の低く落ちついた声が、重くひびく。

足をとめた俺の背中にも、その声がぶつかる。

「なにか、知りたいことがあつたから、また図書館に来たのでは？」

俺おれはふりむいて、にらむ。

当あたり前まえじやねえか。知しりたいから、本ほんが読よみたいから図書館としよかんに來きたんだ。
白井しらいは俺おれに歩あゆみより、さらにたたみかける。

「だれかに教おしえられるのではなく、知しりたいから、本ほんを開ひらく。いちばん純粋じゅんすいな、ほんとうの『学まなび』です。」

弁償べんしょう図書としよを印刷いんさつした紙かみをこちらにさし出だし、問といかけてくる。

「あなたがこの本ほんを借かりたときも、なにか知しりたかつたのでは？」
うけとつた紙かみをしばらくにらんだあと、ぐしやりとにぎりつぶした。

「覚おぼえてねーよ！ そんな大むかしのこと！」

図書館としよかんから出でたあと、俺おれは、近ちかくにある本屋ほんやの前まえにいた。

そして二十分ふんほど、決心けっしんがつかずに本屋ほんやの入り口前ぐちまえをウロウロして、ムダに自動ドアじどうを開あけたり閉しめたりさせていた。……やつぱり、なんだか恥はずかしい。

でも、こんな道ばたでグズグズしていたら、知り合いに会うかもしれない。

覚悟を決め、入店する。

早歩きで店内を見わたすと、児童書コーナーが目に入った。近づく、親子連れの客が見えて、ためらってしまふ。自分がこんなところにいたら、悪く思われるのではないか

……そんなざわついた気持ちになる。

本屋なんか、たくさん人はいないだろうと思っていたが、親子や、会社帰りの人、学校帰りの人、いろいろな客がいた。同じ高校の顔見知りに見つかってしまったかもしれない……『わくわく☆しりたい どうぶつのなぞ』をかうところを。

イヤだ恥ずかしい……。

……帰るか？

なんでも頭にうかぶにげ道を選ぶとするたび、今日投げかけられた言葉がくり返される。いけ好かない、眼鏡をかけた、やたらたくましい男……白井の顔とともに。

——あなたがこの本を借りたときも、なにか知リたかつたのでは？

ここまでにげてはいけない、もともと自分が持つていたなにか大切なものを失ってしまうような、そんな気分になる。

「ねえねえお母さん、なんでさあ、なんでさあ。」

迷いつづける俺のうしろにいる親子の会話が耳に入る。

「また……『なんで』がはじまった……もオウ自分で調べてみな？ ほら図鑑が……。」
あきれる母親の声。

「自分で調べたほうが、覚えてられるよ！」

よく聞いた言葉だった。むかし、俺もそう言われた気がする。親に。
両親が離婚してから、会っていない父親に。

あれは俺が小学一年生のころだったか……父親と動物園に行った。

俺の父親は、どれだけ長いこと同じ動物をながめていても、せかしたり、お金がもつた
いないとほかの動物をたくさん見せようとしたりしない人だった。だから、好きだった。

その日も、ワニを長いこと見ていた。恐竜のような生き物が現実にいるのが、面白いしかつこいいから、ワニが好きだった気がする。

そのあいだ、ワニはずっと口を開けていた。ポカーンとしているようにも、するどい歯を見せびらかしているようにも見えて、ふしぎだった。

「ねえお父さん！　なんでワニずつとクチあけてんの!?」

檻の前で問うと、父親は軽く笑う。俺がいつもそういう質問ばかりするからだ。

「自分で調べてごらん。そのほうが勉強になるから。」

それまで、父親はこういう質問には、わかりやすい説明をしてくれることが多かった。小学生になってから、こう言って図書館につれていってくれることが増えた。

すぐに教えてくれればいいのに、と俺はそのとき思っただし、今でもそう思う。

だって、けつきよく、そのとき調べたはずの答えを今、覚えていないじゃないか。借りたはずの本も、両親の離婚や引っ越しで、どうしたのか忘れてしまった。

そのていどのモンだよ。

帰るか。

出口に足をむける。バカバカしい。ワニなんかどうでもいいだろ。

ワニなんか……。

ワニ……。

自動ドア目前で、俺はくると反転した。

『なぜワニは口を開けたまま、じつとしているのか。』だなんて。

くツツだらねえ。人生の役に立たねえ。

でも、どんなにくだらねえことでも、知らないままだと、なんだかイライラする。

チクショウ！ 今すぐ知りたい！

思い出した。俺は、むかしからそうで、今もそうなんだ。

児童書コーナーにある、口を大きく開けたワニの写真の表紙。

俺がむかし失くした『わくわく☆しりたい どうぶつのなぞ』という本を手にとる。

パラパラとめくると、表紙と同じワニの写真がのったページが目に入った。

そのページにはこう書かれていた。

『ワニは日光浴中よく口を開けてじつとしています。それは体温を調節するために口を大

おすすめの
えほんコーナー



おやすみのえほん

きく開^あけているのだと考^{かん}えられています。』

「……へへ。」

思^{おも}い出^だした。そうだった。はじめて知^しったそのときも、「へへ。」と言^いったのだった。そのときはたしかに、知^しらないことを知^しるのが、ただ純^{じゅん}粋^{すい}に樂^{たの}しかった。

翌^{よく}日^{じつ}、買^かった本^{ほん}を持^もって、俺^{おれ}は図^と書^{しょ}館^{かん}にまた来^きた。

昨日^{きのう}は「二度^{にど}と来^こねえよ。」と言^いってしまつたのに、のこのこやつてきた。氣^きまずい。なるべく、昨日^{きのう}会^あつたやつらには会^あいたくないが……いた。

長^{なが}いスカートで、眼^め鏡^{がね}をかけ、口^{くち}元^{もと}にほくろのある女^{おんな}がちようど本^{ほん}を運^{はこ}んでいるところだつた。

近^{きん}所^{じよ}の本^{ほん}屋^やの紙^{かみ}ぶくろをつかんだ俺^{おれ}のようすを見ると、につこり笑^{わら}い、案^{あん}内^{ない}する。「どうぞ、お待^まちしておりました。」

昨日^{きのう}と同^{おな}じ部^へ屋^やで、弁^{べん}償^{しょう}届^{とけ}とかいう紙^{かみ}を書^かかされた。

白井は、昨日の鬼のような恐ろしい形相がウソのように、ニコニコとごきげんで弁償の本を受け取り、新しい貸し出しカードまでいいねいに再発行してわたしてきた。

「はーい！ 弁償完了しましたので、カードお使いいただけまーす！」

あまりの変わりようで、正直、気持ち悪い……。

横に立っていた女、早瀬丸にこっそり話す。

「こいつ……態度変わりすぎだろ。」

「申し訳ございません、あとで指導いたしますので……あつ。」

早瀬丸は申し訳なさそうに頭を下げたあと、なにか思い出して本を一冊、持ってきた。

「石平さま、こういう本に、ご興味ございますか？」

「なつ……なんで、俺がその本探してたってわかるんだよ！」

ぎよつとした。それは昨日、俺が手にとった廃棄予定だという古い本だ。

「いえ、昨日こちらをごらんになっていたので、もしかしたら……と、白井が。」

弁償届をファイルにしまいながら、白井がニツと笑う。

なんなんだこいつら。感謝すべきなのか、怒ったらいいのか、よくわからない。勝手な

ことしやがつて。とまどいをごまかすように鼻をならし、言った。

「……フン、まあいいや、それ借りるわ。」

「こちらの本はこのとおり壊れて廃棄する本ですので……。」「だれかにびりびり引き裂かれた無残なページを見せられる。」

「こちらではなく……新しい……?」

そこまで言つて、早瀬丸はなにか不安そうな顔になる。

「ちよ……少々お待ちください。」

あわててパソコンのキーボードになにか打ちこんでいる。

ふしぎそうな顔で白井がパソコンの画面をのぞき見て……、二人は同時になにかに気づき、悲鳴をあげた。

「げえっ!」

「あ? なんだよ……。」

なんだか知らないが、早く俺にも説明してほしい。

青ざめた顔の早瀬丸が、申し訳なさそうに話します。

「あの……怒らないで聞いてくださいね。」

「場合によるだろ。」

「たいへん申し訳ございませんが……こちらの本を新しく買い替えたものは……現在、ほかのかたに貸し出ししております……その……もどつてきたらお知らせいたしますので……また図書館に借りに来てくださいね♡」

事実がじわじわ脳にしみこんで理解して、そのままじわじわ怒りがわいてきた。

「ふ……ふッぎけんな！　こッ……これ……わざわざ買いに行つてそれかよッ。」

「まあまあ落ちついて……。」

「予約、予約というサービスがございしますので……。」

あばれてやりたかったが、白井にガツチリオさえられ、しぶしぶその本を予約することにした。

「またのご来館、お待ちしております！」

二冊目 恩讐の彼方に

予約よやくしていた本ほんが用意よういできたという電話でんわがあつた。

俺おれは貸かし出しカードだを持つて、また図書館としよかんにやつてきた。

カウンターにむかうと、そこで早瀬丸はやせまるがすわつてなにかしていた。

あれは、本ほんから破やぶれたページページだろうか。破やぶれたにしてはまっすぐな形かたちの紙かみだが。

早瀬丸はやせまるはそのページページのはしに、ねっとりした液体えきたいを筆ふででぬっている。

なにかがぬられた紙かみを、本ほんにはさんで、ぎゅつと力ちからをこめる。

なんの仕事しごとだろう。

「なにそれ。」

「ああ、石平いしだいさん！」

「ん。」

このあいだ作ったばかりの貸し出しカードをさしだす。

早瀬丸は、バビュンとすばやい動きで受け取ったカードをバーコードリーダーで読み取り、カウンター裏の棚から予約の本を持つてくる。

「お待たせいたしました、こちらご予約の本です！」

「うわ、早っ。」

この本を借りるまでにいろいろめんどろなこともあったし、ひとこと文句を言つてやろうと思つていた。だが、今はそんなことより早瀬丸がやつている仕事に気になる。

「んで、それ、なにしてんの？」

「ああ、これですか？ 本の修理ですよ。今、少し手があいていたので。」

大切にあつかつていても、古い本は自然にページがとれてしまうことがある。本を綴じていたのりが弱くなつて、めくつた拍子にポロッとページがはがれてしまう。

そういう本は、本の修理用のりで修理する。とれたページのはし、『ノド』と呼ばれる綴じられる側の辺に、絵をかくのと同じ細い平筆で、水に溶いたのりをぬる。元どおりに

なるようとれたページを本にはさみ、ぐつと力を入れ、重い本を上においてズレないように固定して、のりを乾かす。

そんな説明をされた。

「そつちにある本はもう、のりが乾いたものです。」

「どこ直したかわかんねえな、すげー。」

修理済みの本を見せてもらう。パラパラとページをめくるが、おかしいところは見あたらない。言われなければ、修理した本だと気づかないだろう。

「そつちの本は？」

「こ、これは……。」

俺に指さされたべつの本を、早瀬丸はそつと開く。この本も修理が必要なもののようにだ。

「お子さんが破つたのを、セロハンテープでとめてくれたようで……。」

「うわあ……。」

乱暴に破かれ、いくつもの細かい破片になったページを、パズルのようになんとか合わ

せて、がちやがちやにセロハンテープで貼はつてある。

「まず、そおつとセロハンテープをはがさなきゃいけないくて……。」

「え、せつかく貼はつてあるのに？ そのまんまでいいじゃん。」

「石平いしだいさん、セロハンテープを使つかった工作こうさくとか、長いこと持もつていたことは、ありませんか？」

「あ……小学校しょうがっこうで作つくった工作こうさく、ベタベタになつて捨てたな……。」

「そうなんです。セロハンテープつて時間じかんがたつと、ベタついたり茶色ちやいろになつたりするんです……なので、全部ぜんぶはがして、本ほんの修理用しゅうりようのテープで直なおします。」

早瀬丸はやせまるは修理用しゅうりようテープをしまつていた箱はこから出だして見みせた。

見みえた目はセロハンテープに似にているが、シールのように接着面せつちやくめんに紙かみがついたまま巻まかれたテープ。紙かみをはがすと、非常ひじょうにうすく透明とうめいなので、貼はつたところが目立めだたない。長い年ねん月げつがたつても劣化れつかしづらい素材そざいが使つかわれているらしい。

「へー。」

「だからッ、石平いしだいさんも図書館としやかんの本ほんにぜつたいセロハンテープ貼はらないでくださいねッ。」

「アッ、ハイ……じゃあ、ページとれたら自分でこの、のりと筆で……。」

「ご自分で修理しないで！ そのまま持つてきて！ 図書館にまかせてください！」

「ハイ……。」

なんだか強めに注意された……。

ふと気づいて質問する。

「セロハンテープの本は弁償させねーの？ あきらかに人の手で破つてんじゃん、それ。」

俺が本を失くして弁償したのに、ほかの人は弁償しなくても許されているのは、なんだか不公平な気がする。

「この本は、修理できますからね。図書館としても、積極的にみなさまに弁償していただ

きたいわけではないのですよ。」

「なんで？ 客の金で新しい本が買えるなら、そのほうがいいじゃん。」

「いや、図書館にとつても、めんどろなんですよ、弁償つて！ いろいろ書類を作つて、弁償のお願いの手紙を出して、新しい本を持つてきてもらつて……つて考えると少し時間がかかっても失くした本を探してもらうほうが楽ですし、だいたい本は買つてもらえて

も、この背表紙やバーコードのシールは図書館が買って貼って……。」

「ハイハイわかったわかった！ スミマセンでした！」

また、強めに注意されてもめんどうなので、さつさとあやまっておく。

身をのりだしていた早瀬丸はカウンターのイスにすわり直した。

「なにより、市民の財産ですからね、図書館の本は。大事に使いますよ。破れたページの破片がそろえばパズルになっても修理しますね、できるかぎり。」

「へー。」

図書館の考えはわからないでもない。早瀬丸は次の修理本を手にとって開く。

「うん……？」

「なに？」

「いえ、この本……この破れたところの破片が見えたらなくて。」

ある一ページが、タテ方向に破られた本だ。

ついさきほど、返された本だという。

もしも、本を破ったり汚したりしたら、返すときに知らせてほしいと利用者をお願いし

ており、きちんとした人は知らせてくれる。しかし、だまって返す人もいる。こういう本は破れたページが同じ本のどこかにはさまったままのことが多いらしい。

けれど、この本の破れたページは、本のどこにもない。

「ほ、そういう本もあるのか。じゃあ、直せねえんだ、その本。」

「……………」

早瀬丸は、カウンターのうしろをふりかえり、無言でなにか探している。

ガラガラと音をたて、空の台車のようなものを運んでいる、図書館のアルバイトらしきエプロンをした女がカウンター裏にやってきた。早瀬丸はそいつに質問する。

「さっき返ってきた小説の配架、終わりました？」

「あ、はい。ちようど今。」

「そう……そうだよね。」

早瀬丸がなにか考えこんでいる。

俺はそのすきにカウンターのの中に入って勝手に調べることにした。

カウンター裏には、さっき運ばれていた本がならべられる台車のようなものや、見なれ

ない道具どうぐがたくさんある。

「ギャ!!」

ふりむいて俺おれに気づきいた早瀬丸はやせまるが悲鳴ひめいをあげる。

「気きになるじゃん？　なんか心こころあたりあんの？」

「いや、それよりカウンターの中なかに入はいらないでくださいよ石平いしひらさん！　利用者りようしゃさんの個人こじん情報じょうほうがたくさんあるんですから……。」

「いいじゃねーか、ちよつとくらい。気きになる。」

カウンター裏うらにあるドアから白井しらいがぬつと顔かおをのぞかせ、腕うでの筋肉きんにくをムキムキとちらつかせてくるのが見みえた。

「ア、ハイ……スミマセン……。」

しかたないので俺おれはカウンターの外そとに出でた。しかし、破やぶれた本ほんのことはどうしても気きになる。俺おれは自分じぶんの知しらないことがあるのが、いちばん腹はらが立たつ。

しつこくたずねると、早瀬丸はやせまるは気きが進すすまなそうではあるが、

「ほかの利用者りようしゃの個人情報こじんじょうほうに関するかんことはお話はなしできませんが……。」

と、前おきしてから、この修理本について説明した。

小説『恩讐の彼方に』。

表題作と、いくつかの短編がのっている文庫本だ。作者の菊池寛は明治時代に生まれた有名な作家。彼の死後にもこの小説は愛読され、さまざまなデザインの本が売られている。そのうちのひとつがこの破られた本だ。

「本を破ってしおり代わりにする利用者さんがいるんですけど、そのかたのしわざではないかと……。」

「……は？」

なにを言ってるんだ……。ポカンとした俺を見て、早瀬丸は苦笑いする。

「そんなことしていいわけ？」

「まさか！ 処刑ですよ！ ……いやいや、ダメです、ダメ。」

「とつさに処刑しようとしてんの、ウケる。」

「……もちろん、悪質なので何度か注意もしました。ですが、そのあともつい、やってし

まうらしくて……さきほどそのかたが返した本なので、同じときに借りていた本に、もしかしたら破片がはさまっているかもと思つたのですが……。」

図書館のカウンターに返却された本は、しばらくカウンター裏にある『ブックトラック』という、車輪のついた棚のようなものにおいておく。ブックトラックにあるていど量をためた後、まとめて運んで配架する。

例の利用者が借りていたほかの本も、アルバイトが運んでしまったあとらしい。

「もう書架に本がもどってしまったので、どの本かわからないんですよ。」

「ふうん……あ、貸し出し履歴とかねーの？ そいつの履歴調べてさ。」

「ありませんよ、そんなもの……。」

図書館は、利用者が借りた本の記録を残さない。本を返したら、貸し出しカードからはその本を借りていた記録は消えてしまう。その人がなにを読み、なにに興味があるかなどのプライバシーを守るためだ。自分の貸し出し履歴を見たいのなら、それぞれ自分で貸し出しのときもらうレシートをとっておいてあとで見返すしかない。

ただ、完全に記録を消してしまうと、このように返されたあと破れや汚れに気づいたと

き、利用者りようしやに事情じじようをたずねたり弁償べんしやうをお願いねがしたりできない。なので、本ほんのデータには最さい後に借りた人ひとの記録きろくが残り、図書館員としよかんいんだけが調べられるようになってる。

本ほんを破やぶつてしおりにする困こまった利用者りようしやのように、知らん顔かおでなにも言いわず返かえしてにげようとしても、だれが破やぶつたのか調しらべられるのだという。

図書館としよかんの本ほんを管理かんりするパソコンシステムには、さまざまな機能きののうがある。たとえばその日ひに予約よやくされた本ほんだけをリストにして調しらべることもできるらしいが……。

「今日の返却きよう本ほんリストを抽出ちゅうしゅつして……いや……数かずが多おほすぎて現実げんじつ的てきじゃないな……。」
早瀬丸はやせまるがまた本ほんを探さがす方法ほうほうを考えかんがえこみはじめる。それを見みて、俺おれはふと思おもったことを言いつてみた。

「ふりん……じゃあ、一冊いちさつ一冊いちさつ、開ひらいて探さがすしかねえんだ。」

なんでもないことのように、そう言いった。

早瀬丸はやせまるは『信しんじられない……』という顔かおをしている。

「いや……現実的じゃないですよ。この図書館に本が何万冊あると思つてらっしゃるんですか？」

「えー？ やればいいじゃん。なんも考えなくていいなら、ラクそうだし。」

ケタケタ笑いながら、言つてやった。

学校の教室より広い空間に、背の高い書架がならび、その書架ひとつひとつにみつしり本がつまつているこの図書館だ。たしかに時間はかかりそうだが、それしか方法がないならやればいいと思う。

早瀬丸はあきれたようにため息をつく。

「そんな気の遠くなるような方法……。」

早瀬丸が、ふつと表情を変え、たずねてきた。

「石平さん、『恩讐の彼方に』を読んだことあるんですか？」

「は？」

バカにしているのか。

「読んだコトあるように見えますかア??」

「そんなの見た目じゃわかりませんよ……。」

どういいうつもりでそんなことを急に言い出したのか、わからない。

「いえね、ただ、この本……一冊一冊開いて破片が見つかったあとに読んだら……とつても面白いだろうなって、思っただけです。」

ほくろのある口元、つやつとしたくちびるでいたずらっぽく笑って、そう言った。

「……なんで？」

「読めば、わかります！」

なんだよそれ！ やっぱ俺のことバカにしてるんじゃないか。

「まあ、気長に探しますよ。ほかに仕事もありますし、時間は有限ですから……。」

パラパラパラ。

すとな。

パラパラパラ……。

規則的に、本を開いては書架にもどす音。

「えっ……。」

おどろいた早瀬丸が、こつちを見て目を丸くしている。

俺はカウンターの近くにあった書架から本をとり出してはすべてのページをパラパラめくつて調べ、書架にもどす……という動きをくり返していた。

早瀬丸が申し訳なさそうに声をかけてくる。

「石平さん……『恩讐の彼方に』なら、のっている全集がほかにもありますから、そちらをご案内しましょうか……。」

「はあ？ いやですけど？ ソレ直したあと読むのがいちばん面白いって、アンタが言ったんじゃない！」

俺がこんなことをする義理はない。

でも、「やればいい。」と言ったのだから、自分でやれないのはなさけない。

なにより、氣になる。『この方法で破片を見つけたとき読んだら、面白くなる』。

どういう意味なのか、知りたい！

「絶対直してもらうからな！　ちよつと待つてろ！」

「そう……そうですね、失礼しました。」

早瀬丸はカウンターにむかつて歩いて、しばらくしてこちらにまたよつてきて、小さな

声でひとりごとのように、ささやく。

「こちらの……時代小説の文庫本をまとめたところを、先にごらんいただいたほうが早い

かと……。」

どうやら俺にヒントをくれたらしい。にやりと笑つて、ありがたく教わつた書架の前に

立つて、本を開いて破片を探しつづけた。

破片探しに邪魔な位置に立つていた利用者をにらんでいたときだけ「ほかのかたに迷惑

をかけないように！」と俺を注意して、早瀬丸は仕事にもどつた。

その日は、閉館まで探してもけつきよく見つからなかつた。

翌日も、翌々日も、俺は図書館に来て、同じ書架で本を探しつづけた。

俺おれがもともと本の破片はへんを探さがしはじめたのは、早瀬丸はやせまるに腹はらが立たったからだ。

自分じぶんの知らないことがあるのはゆるせないし、そのことでバカにされるのは、もつとゆるせない。

だが、探さがしつづけるうちに、それだけではなくなってきた。

破片はへんを探さがしながらも、目めに入はいった本ほん、読よんだことがない本ほん、興味きょうみがなかったジャンルの本ほんを手てにとつてみて、へえ、こんな本ほんもあるのか、読よんでみるかという気きになる。

ふらりとカウンターに行いくと、早瀬丸はやせまるが話はなしかけてきた。

「あ、石平いしひらさん。どうです見みつかりました？ 私わしも仕事しごとのあいまに見みていますが、なか

か……。」

「レシートだけ無限むげんに出でてくんだけど……なんなんだよ……。」

探さがしている破片はへんは見みつからないが、貸かし出だしのときもらうレシートだけは大量たいりょうにわいてくる。あと、しおりとかも。

「ああ……はさんだまま返かえされたものですね……申し訳わけない……。」

「あ、あとこれ借りる。」

本とカードをさしだすと、早瀬丸がほほえむ。

「よかった。楽しんでいただけているようで。図書館を。」

「あ？ いや楽しくなんかねーよ……いや。」

もともとアンタがあんな変なこと言うからこうなったんだろう！ と、言い返そうとした。が、少し言いよんどんで、とりつくろうようにつづける。

「……まー、つまらなくはないから、来てるけど。」

「フフ、そうですね。」

意外だった。

どうやら俺は図書館に楽しさを見つけているようだ。

ぼんやりと知らないテレビ番組や動画サイトを観るように、知らない情報が目に飛びこんでくるのは、退屈しない。

自分が知らないことを知るのは、やはり楽しい。

探^{さが}しものが見^みつかる瞬間^{しゅんかん}は、意識^{いしぎ}していないときに急^{きゅう}におとずれる。

この本^{ほん}にはあるかという期待^{きたい}もそれほど持^もたなくなつたころ、その小^{ちい}さな紙^{かみ}の破片^{はへん}は本^{ほん}からぺらりと落^おちた。

「あつ！」

——彼は^{かれ}「あつ」と、思^{おも}わず声^{こえ}を上^あげた。その時^{とき}であつた。了海^{りょうかい}の朦朧^{もうろう}たる老眼^{ろうがん}にも、紛^{まぎ}れなくその槌^{つち}に破^{やぶ}られたる小^{ちい}さき穴^{あな}から、月^{つき}の光^{ひかり}に照^てらされたる山国^{やまくに}川の姿^{すがた}が、ありありと映^{うつ}つたのである。了海^{りょうかい}は「おう」と、全身^{ぜんしん}を震^{ふる}わせるような名状^{めいじょう}しがたき叫^{さけ}び声^{こえ}を上^あげたかと思^{おも}うと、それにつづいて、狂^{きやう}したかと思^{おも}われるような歡喜^{かんき}の泣笑^{なきわい}が、洞窟^{どうくつ}をものすごく動揺^{うご}めかしたのである。

「実^{じつ}之助^{のすけ}どの。御覽^{ごらん}なされい。二十一年^{ねん}の大誓願^{だいせいがん}、端^{はし}なくも今宵^{こよい}成就^{じょうじゆ}いたした」——

(菊池寛^{きくちかん}『恩讐^{おんしゅう}の彼方^{かなた}に』)

弟にめげず懸命に榎の下し、追
了海が力を籠めて振り下して、思
いの手答えもなく力余って、思
ので、彼は「あつ」と、老眼
た。了海の朦朧たる月の光に照らされたる山国川の姿が
った。了海の朦朧たる月の光に照らされたる山国川の姿が
たる小さき穴からのものである。了海は「おう」と、全身を震
ありありと映ったのである。了海は「おう」と、全身を震



本のページをタテに破られてできたその小さな紙の破片には、小説の途中だろう文章があった。まぎれもなく探していた『恩讐の彼方に』のページのかけらだ。話のとちゅうだから、なんのことかわからない。ただ、長い年月をかけた苦労がむくわれる場面だろうと、俺は思った。

「は……よくわかんねーけど、なんでこの本すすめてきたかは、わかってきたな……。」

「ほい。」

俺がなにも説明せずわたしたので、カウンターにいた早瀬丸は、一瞬なんだかわからないようだった。

破られた紙の破片。探していた『恩讐の彼方に』のかけらだ。

「えッ？ 見つかったんですか!? わーすごい！ ありがとうございます。」
感激して拍手される。恥ずかしいので「早く修理しろよ。」と、せかす。

「ええ！ すぐに！」

早瀬丸はさっそく修理用テープをとりだし、ウキウキとごきげんで修理をはじめた。

「……それでよお。」

「はい？　もう少々お待ちくださいね。」

「たしか本からだとして……最後に借りたヤツがわかるんだったよな。」

早瀬丸が修理に集中しているうちに、俺はまたカウンターに入りこんだ。

「だから！　ココ入っちゃダメですって！　個人情報……。」

「その、個人情報を知りたいんだよな……その本、破ったヤツ……どんなヤツか知りて

えな。あと、住所も……教えてくれよう。」

拳をパキパキとならす。こっちは苦労させられてるんだ。力づくでもやってやる。

「いや、教えられないに決まっているでしょう!?」

強引に図書館員用のパソコンをのぞきこもうとすると、早瀬丸はヒーローに助けを求め

るようにさげんだ。

「白井——ッ!!」

かけつけた白井はその腕力で、俺を猫のように軽々と持ち上げ、カウンターの外にそつとおろした。

「くっ……。」

腹立つ。白井は接客スマイルでやさしく話しかける。

「石平さん、お気持ちはわかりますよ。でも例のクソ……失礼、困った利用者さんは僕（ぼく）ほうでブツ飛ば……いえ、よく注意しておきます。安心してくださいね♡」

白井の顔は笑顔だが、かたく握った拳にくつきりと怒りの血管がういている。白井も、本を大事にしない利用者のことはいまいましく思っているのだろう。

「いや、注意するだけです。ほんとうに注意するだけですからね。」

早瀬丸のフォローもむなしく、（この白井って人、ヤバイな。）と俺は思ったが、困った利用者の個人情報を知ることがあきらめて、帰ることにした。

俺は帰りのバスの中で『恩讐の彼方に』を読んだ。

けっこう面白い。

たしかに、苦勞して破片を探してから読むこの物語は、ふつうに読むのとはちがう感情がわいて、とくべつな面白さがあつた。

しかし読み終えると、べつの感情もわいてきた。

……なんで本を破ったヤツのせいで、ぜんぜん関係ない俺が、時間かけて破片探し回ることになつてんだ？

破片を探す数日間、ぼんやり不満に思っていたことが、本を読んだあと、はつきり怒りの形になった。犯人を見つけて、こらしめたい。しかし図書館のやつらは犯人の居所を俺に教えてくれない……。どうしたらいい……。？

「あつ！」

よくないことを思いついた。

数日後、開館前の、利用者がまだいない朝の図書館に、俺は立っていた。

開館中より、ほんの少し「素」に見える表情の早瀬丸が、空のブックトラックをテキパキ運んでいる。その早瀬丸を、ほかの図書館員が呼びとめた。

「新しいバイトさんに、配架の仕事を教えてあげてください。」

「はい。」

早瀬丸は返事をしてふりむくと、ぎよつとして眼鏡の奥の目を大きく見開いた。
「ドーモ！ 新人の石平でえゝす!!」

「!？」

胸に『としよかん』とプリントされた緑のエプロンに
身を包み、『バイト』の赤い腕章を腕につけ、
元気にダブルピースで楽しげに立っている、俺。

俺がその、新人アルバイトだ。

「なんにもわかんないのでエ、教えてください♡ 本破るヤツの、住所とか!」

ケタケタ笑う新人アルバイトを前に、早瀬丸は、みるみる青ざめていった。

